

JaSPCANかながわ大会報告

2021年12月4日(土)～5日(日)、日本子ども虐待防止学会(JaSPCAN)第27回学術集会かながわ大会が、横浜市(会場:パシフィコ横浜ノーズ)で開催されました。

《特別講演に参加して》

日本子ども虐待防止学会は、医療、保健、福祉、教育、司法等を含めた虐待防止にかかわる職種が一同に参加する年一回の学術集会を行っている。今年度は、コロナ禍が小康状態となった12月初旬に直接参加とオンラインを併用したハイブリッド形式で開催された。参加者は3600名を超えた。「誰ひとり取り残さない～思いをカタチに～」が学会テーマで、海外からの講演、特別講演、シンポジウム(大会企画、公募)、口頭発表のプログラム構成であった。

その中で筆者が出席した特別講演「少年事件からあぶり出された社会の責任～川口市祖父母強殺事件の取材より～」を報告したい。対象となる17歳の非行少年は親からのネグレクト、身体的虐待、性的虐待の被害者であり、さらに「居所不明児」として小5から義務教育を受けていなかった。演者は2014年に発生した事件を取り上げた元新聞記者の山寺香氏と、指定討論者では児童相談所(以下、児相)児童福祉司が登壇した。一時保護のチャンスを逃したことで、ともすれば批判の対象となった児相ではあるが、「ふり返ることが使命だ」としてあえて学会に指定討論者として参加されたので関心が高まった。山寺氏からは、事件の経緯について以下の報告があった。

少年の小4時から母がホスト通いにはまり、小5には父母離婚。その後、ホスト出身の養父と母が再婚、同居したが、その暮らしは、パチンコ・ゲームセンターに興じる母のもと、生活費が足りなくなると、少年に祖父母に金を無心させるといった生活であった。生活拠点はホテル暮らし、テント暮らしとホームレス状態のすえ、中2の時に、横浜市で保護をされる。ゆるやかな支援が6か月続くも、一家で逃げ出し、中3には養父が失踪。以後本児が生計を立てるために働くが、母の命令により前借や金銭持ち出しなどで職場を追われる。いよいよ無銭になった少年が出入り禁止だった祖父母宅を訪問し、金を貸してほしいというものの祖父が拒否。少年は、「金のないのはあなたのせいだ」と責められていたこともあり祖父母を殺

害したうえ、金銭を盗むにいたった。少年は生活費をめぐり、養父から身体的虐待や性的被害をおいながらも、なお母から見捨てられないかと不安を抱き、養父不明後も、金策のため、母の言いなりになり犯行に至ることになった。

「居所不明児」の対応については2013年以後、自治体間での連携が進められつつあるが、それまでは皆が気にとめながらも、救い出すことはできず、少年自ら声をあげることはなかった。また、異父妹出生時や、少年が中2の時、児相にホームレス状態で発見されたときもチャンスがあったが逃してしまう。なぜ一時保護に至らなかったのか。現在なら一時保護したであろうということ添えながらも、出席した児童福祉司は、当時の担当者からの聞き取りとして「当時の児相は4名のスタッフでホームレスの家族に会いにいったが、幼い妹の育ちがよかったこと、少年が妹をかわいがっていたこと、初めから拒否されると支援につながらないため、『支援の糸にひっかけよう』と強く意識したこと、『分離はかわいそう』という『ゆらぎ』もあった。一時保護をすれば少年から直接気持ちを聴くチャンスがあったが、それを失ってしまった」と真相を語られた。

翌日、筆者は座長として大会シンポジウム「どの子どもも取り残さない。地域多機関協働による早期支援について—児童相談所と子ども家庭総合支援拠点、子育て世代包括支援センターとの有機的連携の在り方—」を進行し、アセスメントから支援にいたる機関連携・協働作業の重要性を参加者と共有した。前述の特別講演後の議論では残念ながら触れられなかったことだが、この少年事件でも機関連携の課題が大きかったと思われる。少年の在宅支援を決定し、区の要対協利用としたならば、学校や保健センター、保育所などの子育て支援部署との共同アセスメントから迅速に連携支援すべきではなかったか。(協会理事)